

912.4

Ti 238 y 3

世繼會我
法問
同
年
金

088374-000-3

912.4-Ti 238 y 3

世繼會我・金平法問諍

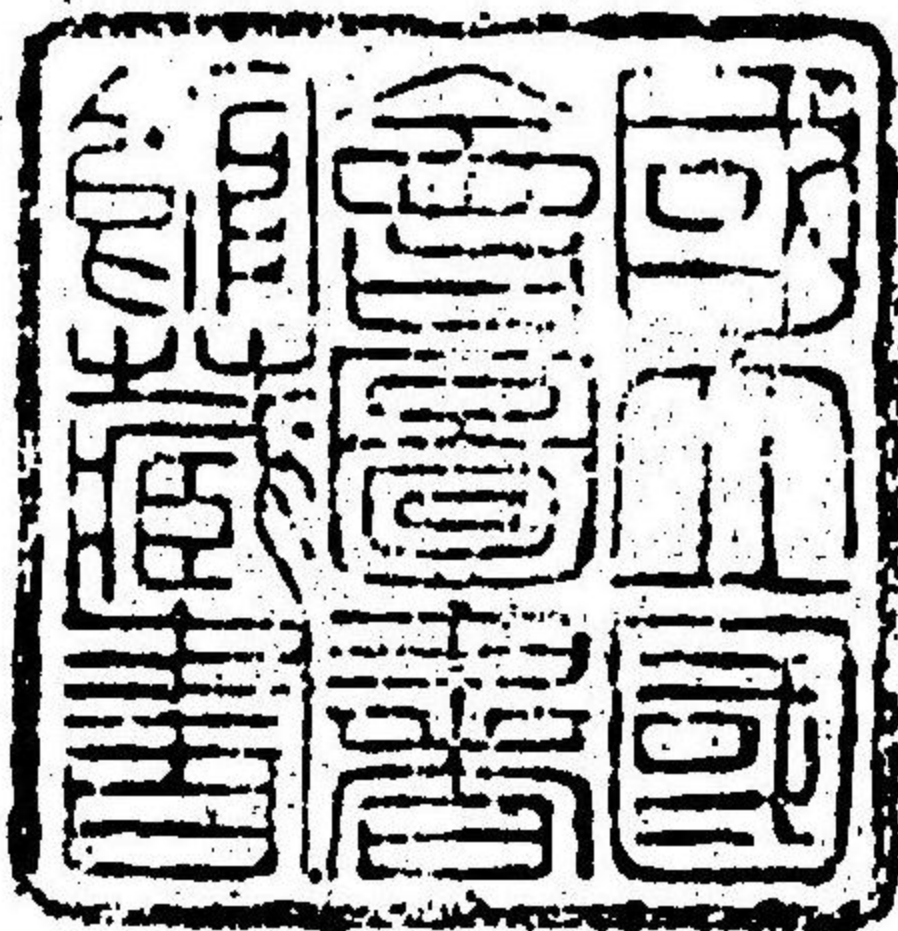
近松 門左衛門 / 著

M29

DBI-0219



9124 T: 238



337101

世繼曾我

近松門左衛門作

第一

扱その後。それ天下太平。國土長久安全に。治まる富士の山なれば。裾野の草の葉末まで。靡ぬ方もあらざりし。源氏の御代こそ目出たけれ。其頃右大將頼朝公。淺間三原那須野の原。あさづまの狩倉より。富士野御狩有べしとて。諸大名思ひ〜に小屋うたせ。君と守護し奉つれば。左しもに廣き富士の裾野に。駒の立をいなかりけり。斯る由々しき折節。いとせ工藤左衛門祐經に討れたる。河津が二人の子曾我の十郎祐成同じく五郎時宗。假屋の内へ忍入り歙祐經討果せ。其上御所の侍三百余人に手と負せ。祐成は仁田に討れ。第五郎時宗。御所の五郎丸に生擒れ。鷹の岡にて斬れにけり。斯て頼朝公梶原と召れ。明日の鎌倉へ歸るへし。凡そ此度具したる諸大名。裝束更ため出立せ。とめたりし鳥獸類の色々と名乗せよ。奉行に新開の荒四郎と申つけ。帳面に委細と記させよとの御説なり。梶原畏まつて御前と罷立。郎黨共に申つけ。御陣の假屋のその内と一々次第に觸にけり。法程に頼朝公井標高く經營せ。ひた白の幕打せ左も大様に座し給ふ。君の左の老

世繼曾我

中なり。さて御兒姓中花と飾りて見へ給ふ。その時國々の諸大名。思ひくしの狩装束。駒の鼻と立ならべ。裾野と袂しと扣るたり。叔新開の荒四郎棟梁と賜り。大紋のつゆと結んで肩にかけ。筆取一人召具して。御座の右手に伺公して次第く記しけり。まづ一番に春日野や若紫の装束に。白いの行勝たふやうに。萌黄の裏うち竹笠と木枯しに吹さらし。陸奥立の荒馬に乗たる武者の誰人ぞ。狩場の獲物の如何に。さんい某の先年我君七騎にて。敵に襲われ給ふ時寄邊定めぬうたのたの。安房の國龍が騎にて。甚はだ忠と願みける土井の彌太郎遠平なり。一昨日の列卒いたに猪と引組んで。早速とめていと名乗て通れば。筆取の頼て斯とぞ記しける。二番に掲布の装束に金襴の小手とさし白熊の敷皮。さび月毛の馬にふぐみ鬘と懸させし。天晴なる出立や。誰人なるぞ誰やらん。誰ぞやとい人がまし又申さんも如何なり。名乗るも流石耻らし。盛長にて候誰に紛ゑて藤九郎。鹿子三頭と答へつ。静のにこそ通しけれ。三番に木賊色秋野の摺たる狩衣に。大口の稜高とどり。尾花茸毛の馬に乗り手綱退取り。おられ出たる若侍。家名實名名乗られよ。名乗れとは浪のまに。瀧鹽燒三浦の平六兵衛義村。二ッ連たる飛鬼。退駈けく峯へわ

け谷へ下つて懸違へ。其儘兩手に引摺み上覽に入しるば。汝の翼やあるらんと。御藏ふれにあづかりし。今更名乗も事くとしと。左も大様にぞ通りける。その次の梨打鳥帽子に鉢巻し。むらがるの袖印。鹿子の行勝くり下げ。足利様の染手綱鞭に探へ線懸し。馬上の達者の實にまこと秩父の重保いな。何と包まん隠れなき園生に植し紅の。染羽の矢先にるけ鳥と。二ッ續けて射て落し。見参に備へねど証人紛れぬす。御帳に記し給ふべし。實に尤と夕間暮。雲立笠の狩衣。青漆の尻鞆かけたる太刀と帶し。雲雀毛の馬に淺黄の總のけさせし。是の信濃の國。相澤の彌五郎鹿壹頭射留て候。續いて小松の摺衣露と合みて絞りあば。徒歩立の弓杖の誰人の下人ぞや。さんい上にも豫て知しめそ。畠山が郎黨本多の次郎近經去ぬる廿日の朝山に。御馬屋の徳竹が手負猪に退立られ。今と限りと見へし時。尾のへ公横に走りつけ。猛つて嚇せる荒れ猪の。片脇とつて引伏せて草分と三刀に突留申て候。嗚呼がましう候へ共。御尋ねなればと會釋して。人溜居にぞ入にける。跡より乗て出しはの流石氣高き亂れ髪。額に滿る月の貌二八ばかりの若武者の。何方の御曹司聞ま飲やといひければ。抑もこれの村上天皇の後胤と作り忍ぶ丸。富士川の岸行く鹿と

跡より追うけ。先へ廻り向ふと射留候と高聲に呼いつて。手綱搔くり静づくくと歩ませし
の。由々しよりける次第なり。八番に糸毛の腹巻駈の駒に目結の手綱。一際勝れて出立し
の誰人なるぞ。さん候是の御所の五郎丸。此度の狩倉に。左までの事のあらねども鬼神と
言れつる。曾我の五郎時宗と生擒て候なり。御帳に記して給われど。打て過れば荒四郎天
晴比類なき御手柄。曾我十倍ぞと誓いつて。願て帳にぞ書せける。扱その外甲斐源氏三浦
の一黨伊勢平氏。坂東坂西北陸道。南の紀の路八庄司。在鎌倉の諸大名。都合十萬七千余
騎。駒も千歳と嘶ふれば君の御威勢。知る知ぬもおしなべて。萬々歳とぞ祝ひける。斯る
處に朝比奈の三郎義秀の。遠侍に扣へしが。するくと立出新開が傍にむんすと直り。
やあ荒四郎見れば御分の耳聞へぬ。目のなきの何共不審晴やらすと。苦々しくぞ申ける。
新開氣色と損じての某と侮りたる言分のな。汝が眼に能く見よと。太刀の柄に手とかく
る。義秀冷笑ひていや汝等合點もらすば。子細と語つて聞せん今日の結構の。何事とか思
ふらん。此度御狩に留たりし。鹿積鳥の物數と書留よとこそ上意あれ。何ぞ御所の五郎丸
が時宗と生擒し帳面に記す事。いつの間にも時宗が鹿にばし成けるぞ。眼も耳も有なら

ば事の道理と篤と聞け。曾我の三浦の一家なり。我々とても進れぬ中。彼の兄弟が働きの
日本無双の侍と。君も御褒美なされしに。已れが分にて善もく。畜生にのしけるよな。
幸ひのな已れと切て此朝比奈も御狩にて。新開の荒四郎一疋と記させんと。飛んで懸れば
人々慌て押しめ。御所なるに去とての鎖まり給へと制しける。頼朝御覽じ仰せ出されける
様。朝比奈が一條一々道理至極せり。去なつらる程目出度鎌倉入双方和談あるへしと。
御座と立せ給ひけり。左しにも勇む朝比奈も君の仰の重ければ。ゑく已ばら上意なれば許
し置。誠に曾我の時宗は命助あるものなれども。侍の道と守つて死するぞや。けふの帳面
に五郎丸が時宗と生擒たると云のらり。曾我の敵の五郎丸。重ねて曾我の所縁あらば此朝
比奈後見し。必らず狙ひ討すべし。新開とても危なしと。はつたと白眼で言ければ。始の言
葉荒四郎後の標々ふるひつ。行さ中く氣遣しく。見返りく退出す。朝比奈猶も怒
となし時日の少し延るども。已れら二人の奴原と争でか助け置べきと。獅子奮迅の怒とな
す。彼の朝比奈が言葉の末。尤斯こそ有べけれどと。貴殿上下おしなべて。皆威せぬもの
こそなかりけれ

第二

その後新開の荒四郎。朝比奈の三郎にさんく悪口せられつゝ。無念更に晴やらす如何せんと思ひしが。我一分にて叶ひじと。五郎九と呼寄せて斯様くの次第なり。此上の義秀と生て置ものならば。以後とても兩人が悪となるべきに鏡にかけて覺へたり。三浦が館へ押寄せて朝比奈に腹切らせ。浮世と廣く暮さん如何あらんと申ける。五郎九聞て去なら日中に押寄せん君への聞へ世の憚り。所詮今宵夜討にせん。いざ討立んといふ儘に。都合其勢三百余騎馬物の具と用意して。朝比奈館へ押寄せて関の聲とぞ上につける。朝比奈此由聞より。大手の門へ走り出何者なれば狼藉や。其名と名乗れと呼はつたり。斯て寄手の大將駒一陣に駈出し。只今是へ押寄しん珍しうらぬ御所の五郎九。新開の荒四郎兩人なり。去ば富士野の悪言以ての外の不禮なり。其本懐と達せん爲め我々是迄向つてあり。命惜くば以後とても遺恨なき由と。降参せよと呼つたり。義秀聞てうらくと打笑ひ。扱も申せし不敵さよ。敵にあふての柴垣破つて高這し。又の女に身と化て偽り高名こそ能ならん。侍に打向ひ晴業の合戦の。このれ等が分にての思ひも寄ぬ過言なり。入らざる推

参申さんより。やあ其陣と引退き命とつげとぞ申ける。兩人聞て腹とたて物云せを軍兵共。恐れく下知れば。兩方互ひに入亂れ軍の花とぞ散しける。戦中場の事なるに。寄手の陣より六尺もたうの大男二人。得物く引提ゆらりくと立出て。大音上にて云やうの斯く申我くこそ。定めて聞も及らん。五郎九が家の子片瀬の大六。同じく扇か谷の陸童なり。人がましき者あらば是へ立出手並の程。そつと心見せよやとて仁王立に立たりけり。古郡左衛門此由と聞より。するくと走出借も由々しき過言のな。手並の程と心見ん参り候へと討て懸る。大六陸童これと見て。是こそ願ふ敵なりと兩人一所に渡り合。半時斗りを戦ひける。され共勝負の見へされば。寄れ組ん尤もと押並べてひんずと組み。上と下へと返しける。古郡少とも更に事ともせず。兩人と押伏せ首一々に討落し。日頃鎌倉にて鬼神と言れし大六陸童兩人と。古郡が手に懸て打取たりと呼つて。左も大襟に引返す。五郎九是と聞き南無三寶といふ儘に。壹丈餘りの鐵の棒輕々と提げ。一文字に打て出る。味方の軍兵すの大將なるの余すなど。我もくと駈出る五郎九さつと見て。えいものくしやと渡り合。向ふ者の真向逃る者のおし付高股嫌ひなく。はらりくと薙伏る。

手許に進む者共と四五十八薙倒し。残りし奴原東西へむら／＼ばつと追散し。近附く敵の
 あらざれば。とある所へさつと引暫らく息とどつきにける。朝比奈見てお、甲斐／＼し
 働きのな。去ながら雜兵と何百人打たり共。果敢く敵事あらじ。此義秀と引組んで勝負
 とせよ。尤と押並べて引組だり。上手に懸けて義秀と押ひしがんとせし所と。朝比奈右の
 腰と指延べ。大渡しに引のけ彼處へとうと取て伏せ。首捻切らんとせし處に。新開透さず
 駈來り朝比奈が鬘と取り。引倒さんとする處と義秀もの／＼しやと。新開と撞搦み後様に
 投出す。その隙に五郎丸。朝比奈と刃退け新開諸共逃たりけり。義秀見て余さじと。揉み
 に揉ふてぞ追懸る。されども遙に逃延たり。朝比奈今の詮方なく。る／＼思ひのけたる一念
 の。争で空しく果つべきと。齒嚙と鳴して引返す。彼の義秀が其勢ひ宛然不動明王の。
 荒たる氣色も斯くやらんと。貴賤上下おしなべて。皆感せぬ者こそなりけれ

第三

その後曾我兄弟の郎黨。兄に鬼王弟に團三郎と申もの。祐成や時宗の未だ幼き比よりも。
 影の如くに附添ひて共に敵と狙ひつゝ。此度の落着には是非二世までも御供と。遂て隠れ

せしに祐成も時宗も。母の御事氣遣しく最期の御供許されねば。力及はず兄弟の記念の品
 を取持て。主なき駒の口と取り泣く／＼曾我へぞ歸りける。斯る處へ誰との知らず暫く
 と呼のけて。何れもは曾我の御家人鬼王團三郎にて在ますや。是の朝比奈の書状なりとて
 差出す。鬼王請取り扱き見ればおた／＼が主人曾我兄弟。君御裁許明らかへ何れに仇と
 殘さず。相果らるゝといへども。子細有る事にて新開の荒四郎并に御所の五郎丸。此兩人
 曾我の敵に相極まる。御分等兄弟の内一人の曾我に歸り老母に仕へ。一人の早く鎌倉へ歸
 るべし。義秀が手引と以て。彼の者共と討とべし。早疾々と書れたり。兄弟大に喜び使
 者に一禮相述べ。鎌倉へ歸し借鬼王。團三郎と近付此上の某鎌倉へ取て返し。五郎丸荒四
 郎と狙ふべし。和殿の曾我に立歸り御記念と奉り。御母君とも養くみ申せと言ひければ。
 團三郎聞あへず。いや某の若輩者の事なれば。御母君の勞りの中々呼ひ申まじ。思ひ定
 めて候へば身い／＼になる連も。古郷へどての歸らぬなり。左程に思し召ならば。御
 身も我も歸らんと。言葉と放つて申ける。鬼王聞てお、誤まつたり團三郎。此上の兩人共
 に三浦へ打越て。朝比奈殿と頼み主の敵と打取て。世上へ其名と殘さん事案の内と思ふな

り。去ながら御記念の品々と曾我へ送らん便りがな。あらず欲しやといひければ。團三郎承り。お善き便りこそおはしませ。大磯の虎御前化粧坂の少將。此兩人と頼み密りに送り申へし。さぞせ給へ鬼王と兄弟打連れ。それよりも化粧坂へぞ急ぎける。是の扱置大磯の虎御前。つくづくものと案ずるに實にうけ難き人界の。此生と受なあら。例し少なき川竹の。流の身こそ定めなし。思ふも思はざりけるも。夜毎に替るうき枕。愛さ中にも勤めとて。朝な夕な化粧坂。此身も同じ愛勤め。是に付ても少將の。如何渡らせ給ふらん。今宵行てや大磯の勤過に忍び出。辿りくど露踏ば。猶しも濡る。我袂。化粧坂にぞ着れける。折ふも少將局に出。善ふこそ渡らせ給ひたれ。此方へ來らせ給へとて。常の處へ入給ひ互ひの思ひと語らる。斯る處へ鬼王兄弟化粧坂へ來りつ。夜討の次第討死の有様と一ツの巻物に認め。是と御覽じ候へて。御慰みませと泪と共に出しけり。虎少將聞取す。このそも誠の悲しやと。其儘其處に倒れ伏し。消入様にぞ歎る。神ならぬ身の悲しさよ。斯とは知らで様々に。恨み申せし因果なやな。夢にだにも知るならば。諸共にこそ死せずとも。何しに浮世に存生へんと云も敢ず鬼王が。腰の方に取付ばこの如何に

と押留め。我々さへ御最期の御供とば許されず。況て女性の御身なり。左様に思召ならば永く御跡用せ給へと。様々教訓申つゝさて我々の朝比奈より。斯様くの御状もへ新開の荒四郎五郎九といふものと。討申さん其爲に道より歸り候なり。御離義ながら此馬と御記念の品々と。曾我へ送りて給ひるべし。片時も早く我々の鎌倉へ取返し。二人の奴原討取て曾我生靈に手向んと。泪とばらりとぞ流しける。今の早虎少將當る道理につめられて。左あらば我々御記念と。母上に捧ぐべし。さらばくとの涙の別れぞ哀れなる。さうとて。戀の曲者皆人の。迷ひの淵や氣の毒の。山より落る流れの身。うさねの琴の調りや。曳手数多に繁けれ。思ひ出すの彼人の。記念の駒の口と取り。夫もへ沈む身の行衛。思ひ道れて哀れなり。悉多太子に別れにし。車匿童子が往古の檀特山の時傳ひ。穢野の駒の諸手綱。脆き涙に暮けるも。それの生ての別れぞや。我身の愛さ富士の山。裾野の原の草隠れ。露の下にや兄弟の。はや入相の鐘の聲。寂滅爲樂と響けども。輪廻の花の散もせず。いつの火宅の門とさへ。伊豆の三鳥のしほさ取る。浦の煙りの一結び。又二結び。よれて纏れて解て亂れて。靡き大磯。君とこいその道すがら。去りし夕の頃迄も。此處

と通ひて來にけらし。此駒よく。鞭と打れし恨とも。今は記念と思はずやと。二人手綱に繼り付。口説給へばさすが氣に。聞入れたりし風情にて。双膝折て身ふるひし。頭と頂垂れ耳とふせ。主の別れと歎さける。たが玉章の箱根山。涙に染みて赤澤山。鎌倉山の谷くも。うげけと晒すの蘆高山。新藤のくなる臥緒の床に。石の枕や苔庭。二人かばさは悪らじ。待人持ぬ歩路の旅。すゞの篠原。眞葛が原。小菅蓬生玉蔓。押わけ搔わけ。しごもごもに知邊なく。主なき駒の馬方いやよ。穗に出て逢ふ夜も有。鞠子川。御身とても我とても。花ならば初櫻月ならば十三夜。盛に足らぬ身と持て。思ふ人への添もせず。かゝる憂さ目と見る事よ。是も誰もへ紫の。一もと結の縁ぞや。歎き給ふな歎うじと。諫められての諫めつ。水洩さじと契りとく。其移り香も残るや袖。手に手と取りて行く程に。曾我の里にぞ着にける。虎少將の其有様哀れとも中く。申ばのりのなりのりけり

第四

その後物の哀れと留めし。曾我の里に在します。兄弟の母上にて。殊に哀と留めたり。兄弟富士野へ趣む。けふ廿日に余れども兎角應否のあらざれば。暫しまごるむ隙もなく

。明れば十郎戀しや暮れば時宗戀しやと。待浮岩れ給ひつ。萬事の床に臥し給ふ。二の宮の姉御前女房達に至るまで。後や枕に寄添へて。富士の御狩も過ぬれば。目出度歸らせ給ふへしと。様々慰め奉れど。齡は傾むく老の浪。折節ものとも宣はず。守り居るより外ぞなき。斯る所へ虎少將門外にたゝすみ。涙ながらに案内乞ふ。折節二の宮の姉御前。たそやと立出見給へば。左も愛しき女性二人悄悄として申様。是は大磯の虎化粧坂の少將と申ものにて候が。御兄弟敵工藤祐經と。思ひの儘に討給へど。其身空しくなり給ふ。御記念の品々と取持参り候と。云も果ぬに姉御前。是の夢のや現つらと前後も分ず泣給ふ。虎少將も涙にくれ。誠に御歎きの道理なり。此上の我くも髪も下し姿と替へ。御菩提と吊らひ参らせんと思ひ定て候なり。御兄弟の御記念に母上様と拜みたふ候と。思ひ入てぞ望みける。姉君感じ入給ひ。誠方々の心ざし返すくも頼もしけれ。尤も母上に達せ参らせどう候へ共。兄弟と戀作て。今と限りと見へ給ふに。斯と知せ申なば。中く命も候まじ。去ながら方々の御望み。無下に成んもいのぞと。兎や角案じ給ひしがな。誠思ひよりしぞと。記念の烏帽子直垂と。虎少將にうち着せて。中門に佇立せ頼て内に走り入。な

母上様兄弟こそ敵と討ち。祐成歸り候へ時宗歸り候と。誠しやかにの給へば。悼はしや
 母上は重き程と軽くわけ。何兄弟が歸りしとや。あら嬉しや疾く身の勞りとも打忘れ
 。勇み給ふぞ哀れなり。晝さへ疎き老の身の黄昏過るといしまの。心までくる愛き涙。押
 俯ふいて居たりけり。母嬉しげに御覽じて珍しの兄弟や。終に便りもなかりし故。若し狩
 場の流矢にも當り。過らばししたるものと。案せし憂さの病ふとなり。時と待間の我命存へ
 し甲斐ありて。敵討ての對面。最早死しても本望ぞや。逆もの事に祐經と討たる有様。
 物語りし母とも慰さめ且うい又。冥土にまします父上にも。手向申して教養に。冥途と照
 しまいらせよ。はや疾々とぞ望まる。無慚なるかな虎。少將。母の仰せと重んじて。あ
 つと答へ立上り聞傳へしと。知邊にて。狩場のおの、物語り。聞に枕も濡ぬべし。去程に
 建久四年五月雨の。黑白もわらぬ闇き夜に。今宵限りと白眞弓。引返さじと一筋に。思ひ
 定めて祐經が。狩場の庵に忍び入。松明振つて見てあれば。宵の酒宴に酔沈み。前後も知
 らず臥にけり。浮木の龜や優曇華の花待得たる心地して。兄弟思はず打領さ榮爾と笑ふ。
 心の中こそ嬉しけれ。寝たる敵と討んの死人と斬に異ならずと。歩みの板をうくくくと

踏鳴し。親の敵に見参せよと。呼はる聲に目と醒し起上らんとせし處と。弓手の肩よりめ
 手の助のはづれ迄。ばらりすんとぞ斬付たり。時宗透さず諸脇薙。五ツや三ツの頃よりも
 十八年の天つ風。今吹るへす葛の葉の。うらみの盡し飛懸り。踊り上つて斬る程に歩みの
 板に斬付。門外さして駈出れば。御陣俄に震動し。すい夜討こそ入たりと。上と下へを返
 しける。斯る所に武藏の國太樂の平馬の丞と名乗つて出。ものくしや曾我殿原。参り候
 と云儘に。四尺余りの大太刀眞向にさし騎し。面もふらすのりける。祐成是に有やとて
 小柴の陰よりつと出。一文字に打て懸る言葉に似ざりけり。あゝ振つて逃て行く。ま
 さなふ候平馬殿何處迄と打太刀に。おしつけの外れよりいね掛て斬込れ。踏りくくと
 引にけり。爰に平馬が姉婿に愛甲の三郎と名乗て出た。五郎榮爾と打笑て。子燕の龍樹の
 枝に戯ふれ白鷺の蘆花の陰に遊ぶと。笑ひながら斬拂へば弓手の腕打落され。跡とも見す
 して入てけり。是と見て安房の國安西の彌七。十郎目がけて渡し合ふ。さあ知つたりと聲
 と懸け。二打三打うつ太刀に。高紐の外れより草摺三間切落され。犬居にどうと轉びし
 不復なりけり淺間しし。淺間の嶽の信濃なる。臼杵の八郎景信。時宗に渡り合ひ得たり賢

し余さしと。南無阿彌陀佛の拜み打。真向ニツに割つけられ。夕べの露とを消にける。五番に御所のくる彌五。此處とば我に任せよと。殿しげに駆出る。請取たりやと祐成權に拂ふ車斬。四十余りの鬚男ニツになつて見へければ。皆一同に聲と懸け偕も斬たり切れものな。いやくどつとぞ賛にける。此も未だ止ざるに駿河の國岡部の三郎。遠江に原小次郎二足連たる唐獅子の。牡丹にすたく如くにて。隙とあらせす兄弟に。稻妻よりも猶早く煙と立て飛で懸ると。ひらりと躲してうくして。蝶の羽づのい雫が。雉子とあいにやあとし。刹那の息とも吐せばこそ。はらりくと薙倒し。突立上り汗押拭ふて。誓し息とぞつがれける。八番に信濃の國海野小太郎幸氏。時宗に渡合し膝口割れて引て入る。新開の荒四郎此由と見るよりも。敵の二人で有けるに。さもしや方々よ。いで某が討留て婆の服と取せんと。小踊して馳せ向ふ彼奴が廣言懸ければ。彼處に成さんと兄弟が。飛ぶが如くに斬て出る。此勢ひに恐れと爲し太刀も刀もいらばこそ。小柴垣と押破り高逼して逃けると。笑ぬ者こそなありけれ。其外群る兵卒と此處に投伏せ。彼處に斬伏せ兄弟が手に懸て。五十余人討るれば。手負の三百八十八。爰に伊豆の國の住人仁田の四郎忠常。祐成に渡合ひ。仁田の新手十郎の宵よりの疲れ武者。多くの人と斬ければ。太刀より傳ふ血ののりに。手の内や廻りけん。太刀鐔元より折ければ。差添振て切結ぶ。少し足たち片さがり。上手に成て十郎殿。仁田下へ追おるさんと走り掛つて打つ太刀と。仁田さらりと受流し柄と突て横に薙ぐ。十郎の右手の力足。膝の口と差さけてすんど切てぞ落しける。弓手の足斗にて。半時睡つて戦ひしが。犬居にとうと轉ひける。仁田首と打落す満する年の式十二。惜まぬものこそなありけれ。斯と知らで時宗の御所間近く亂れ入る。爰に御所の五郎丸衣引被さ居たりしと。女と思ひ侮とつて閨々と生擒れ。終に御所に引出され鷹が岡にて斬れにけり。宵と朝に兄弟の一夜と隔て。富士の裾野の露と消へ。名と万天に上たりしと今見る様に物語り。虎。少將がその有様貴賤上下おしなべて。皆感せぬものこそなありけれ

第五

その後二の宮の姉御前。母上に近づき。余り兄弟と待佗給ふ御姿。見申も悼しく候へば。露の間なりとも。御心と慰さめ申さん爲にこそ斯の斗らひ申なれ。是に在ます方々の。

大磯の虎御前。化粧坂の少將とて。兄弟が思ひ入記念と持参し給ふが。母の異例と聞給ひ。斯いたいらせ候と。涙と共にの給へば母上聞し召。何方々の聞及びし。虎少將にて候とや。誠に世になき者共と。死後まで不便と加へられ。是迄訪せ給ふ事のへそくも嬉しけれ。左の云ながら昨日にも。母も空しくなるならば。今の愛き目聞じもの。思へばく方々の前に愛さの増り草。葉末の露と消失し元の更の我身のこと。また絶入てぞ歎ある。虎少將も涙に暮れ。御歎いよも盡じ。老少不定の界にて若きも先立習なり。歎きと止めましくて。記念の御文御覽じ暫し慰みまませと。彼の品々と奉る。悼はしや母上は文押抜き。讀んどのしたまへとも。こぼるゝ涙に目がくれて。文字も定るに見へ分ず。一くだりを見給へば。あら不思議や十郎が手跡にて。守刀の祐若に取すると書て有。此祐どの誰事ぞ。虎承まのり。偕の左様に候や耻しながら自らに。三度の若ましますと。手越の伯母が許に隠し置れ候と。涙と共にぞ申さるゝ。母の夢とも辨まへず。十郎が忘記念のありけるとや。はや疾々と身悶し唯兄弟が蘇生たる心地して。願て使と立らるゝ。乳母抱き來りけり。老母の膝に擁抱さ。さてもく面さしの善く祐成に似しものかな。十郎とも時宗

とも此孫一人の業ぞや。左こそ最期に祐成が。此子が事こそ思ひけめ。思へばく不便やと悶焦れて泣給ふ。左れ共姉君甲斐くしく。老母に力とつけ参らせ。何れよしなき御歎き。夫侍の家に生れ及に懸るゝ習なり。これ又親の爲譽と殘し討るれば。果報いみじきやのり者。誠に斯様の勇ましき世繼の有れば。何事も打忘れ御祝ひまませと諫め給へば。虎少將又こそ参り候んと。古里さしてぞ歸りける。是の備置新開の荒四郎五郎九兩人。朝比奈に追散され耻辱の上に身の大事。如何せんと案じしが所詮此上。虎少將と誑つて曾我が所縁と相尋ね。一々亡ばし其後の朝比奈とも打殺し。浮世と廣く送らんと兩人謀合せつゝ。化粧坂へと急ぎけり。彼處になれば先案内乞ふて。願て座敷へ入にけり。虎少將思ひ寄ざる事なれば。既に座敷と立んとす。其時に五郎九少將が手と取れば。荒四郎虎が手と取り情なし先暫くと引留む。虎少將是と見て御用あらば重ねると立上ると引留め。それ遊君の風情と元とし。情深き遊女とす。御身達の引替て世に無き曾我の殿原と。情深き何事ぞ。今より後の我々と彼の兄弟と思し召。情と懸て給われと。むくつけなる鬘男が愛想なげに申にぞ。虎少將打笑ひ兎角の答辭へ申せばこそ。御心にや障りなん我鬘

も積らば腹立んと。差備いて居たりけり。兩人聞て。奇怪なり汝等。是へ来るの別義なし。曾我十郎祐成が一人ある由。上聞に達し召捕て参れとの。上意と蒙り来りたり。片時も早く出すべしと。奥と差て入んとす。流石女性の事なれば偽り事とい知らずして。裾や袂に縫り付。君の上意の左もあらん。去ながら死失たり共御披露あり。助けさせ給はれと手と合せてぞ歎める。元より實なき事といひ。名にし負ふたる虎少將。左も嫌に申にぞ左程に思し召ならば。いので無情當るべき。心易かれ方々。命助くるのみならず。御前宜しく云直し。曾我の家と取立て参らせん。先目出たし盃と暫し時とぞ移しける。斯る折節鬼王兄弟虎少將と頼み。曾我古里への記念の品を送りしゆへ。聞ま欲しく思ひ。化粧坂へ来りしが此由と見るよりも。大きに悦び偏へに天の與へぞと。義秀方へ使と立る。朝比奈聞と均しく一息に馳来り。大音上て申す様。君と掠むる偽りもの。此内に有と聞く是非の實否と晴さん爲。小林の朝比奈是迄来りたり。早く出よといふ隙に鬼王つと入。頼で障子と押開き。五郎丸今の通れぬ所ぞと。元より聞へし大力物々しやと云まゝに。弓手右手に搔掴み七八間投出す。朝比奈透さず走り懸つて。むづと組む兩方劣らぬ大力。金剛力

と出し此處と最期とせり合し。是や龍虎の戦ひも斯やと思ふ氣色なり。斯する隙に鬼王兄弟起上り五郎丸に飛懸る。朝比奈きつと見て。不覺なり汝等。流石名と得し義秀が加勢と頼み討べきと。云より早く取て伏せ高手小手に縛めて。新開尋ねて廻る。あら無慚やな荒四郎。此勢ひに恐れとなし。逃る處のあらずして。邊に有し長櫃の蓋とわけ其中へ身と隠す。虎少將。この幸ひと蓋の上へ乗あり。女なりとて夫の敵いのでり以て余さんど。出んとそれに乗懸る義秀立寄て。長櫃に繩と懸け。つれづれなり共新開殿。御前へ運行く其内の驚おでましますと。五郎丸と引立。御前と差てぞ上りける。彼の朝比奈が其振舞。天晴剛なる働さやと。貴賤上下おしなべて。皆感せぬものこそなるりけれ

第六

其後朝比奈の三郎。曾我の祐若虎少將。鬼王兄弟召具して。御所とさしてぞ上りける。御所になれば義秀謹んで申様。是は工藤左衛門祐經と討し。曾我祐成時宗が妻子にて御座候。然るに新開の荒四郎御所の五郎丸。此兩人が庵へ参り君の上意と偽り。是なる悴と召捕んと仕り候と。さすが女性の事なれば。當座の難と通れんと様を懸し。某に斯と知らせ

候へ。取敢ず馳參て。子細と尋ね候へば。五郎丸理不盡に打て懸り候へ。是非なく擲
 捕て候。新開これに動轉し。これなる長櫃の中へ隠れ入候と。是迄召し具し候なり兩人と
 召出され。事の實否と御裁許冀ひ奉ると。初終りと言上す。君聞し召し。先長櫃と取出
 し。新開と引出し。諸人の中にて面と晒させよ。畏つて朝比奈櫃の懸繩はらくと切解さ
 。蓋と明れば新開飛出遁んとすると。朝比奈取て押へ。此處にても彼處にても逃足早き男
 かな。白状せよと押ひしぐ。君御覽し暫しが間畠山に預け置。それくとの御誕にて願て
 御前と引立る。朝比奈力及ばず。新開と取て引立彼處へとうと突倒せば。袖にて顔と打隠
 し御前と退出したりけり。斯くて君の御誕に曾我兄弟が振舞。今汝が仁義の程天晴無双
 の者共かな。即ち先祖の本領なれば。宇佐美くつみ河津三ヶ所。祐若に得さすると。安堵
 の御判と下さる。道の道たる御政道有難き次第なり。此事御臺聞し召し仰せ出されける
 様。誠に遊君白拍子偽り多しと聞つるが。今更彼等が有様賢女とや云ん。女郎の懸路の
 しな最懐かしく思し召し。君へ御訴訟なされつ。往古遊女の有様と。學ふで見せよと御
 誕ある。兩女が顔と打あめめ。今昔に馴衣かへすくも耻し。幾度辭退申せども。數

々の御所望ゆへ。御受と申立ければ。御所の御前に町つくり。數多の遊女と召し集め。既に
 用意としたりけり。さくく名殘の調子と。虎少將が調へにて。拍子と揃へて奏でけれ
 。斯くて御腰給り。親子伴ひ立歸り。富貴の家と榮へけり。千秋萬歳目出度と。貴殿
 上すちしなすい。皆喜せぬものこそなすいけれ

金平法間評

忠臣身替物語

作者未詳

頼朝家の内の犬打て共去す。菩提は山の鹿招け共來らず。迷悟只一心の中に有り。抑源家四
 代の武將伊豫の守頼義公。天下安平に治め玉ひ。帝都を守護し在せば民の寵も賑へり。頃は文
 月七日むせいをある夜なれば。御公達義家公。義綱義光諸共に御廉高々と巻上させ。たまし近
 く在せば御家臣外様の人々も。次第く々に伺候して御慰みの爲にとて詩哥狂句様々の興を催す
 盃の。影に連なる初雁は何れの文字と疑ひし。心も深き池水の。濁りに泌まぬ蓮葉に。玉かど
 見へし白露の。戦ぐ嵐にはらくと。落て仇成る粧ひを。君つくくと御覽じて。人間の一生
 によろやくによてんもまのあたり。我天下の武將と成り今生を榮ゆとも。無常の剎鬼に誘はれ
 ば元より爲せる善はなし。爲置にし罪科を何にとしてか免れん。百年の榮耀は風前の塵。一念
 の菩提心は黄泉の燈火。所詮三人の子供の中一人は出家になし未來の爲にと思し入り。次男加
 茂の次郎殿を御側近く召を。我來し方を案ずるに。國々の兵亂に滅ぼせし者數を知らず。尤政
 道と云乍ら。因果の報ひ脱れ難し。それ一子出家すれば九族天よ生すと聞。御分父が菩提の爲

出家沙門の身ともなり。後世を助け得させよと世に染くぞぞ仰せける。義綱暫く有て御説違背申に似たれども。某當家に生を受えら。武勇を捨出家せん事仰せは重くゆへども。眞平御救免下さるべしと。受給あべき氣色なし願義聞召。實に若年なれども遺の器量。去乍ら武士を立て家名を揚るも。又通世し父が罪を助くるも以ては同じ孝の道。其上家の世嗣には八幡太郎有るなれば是非も御分は出家に成り。釋尊のゆいていに隨ひ。佛法修行の身となれと和田左衛門爲宗を召れ。東山の満容上人を招じ。剃髪させよと宣ひ御座を立せ給ひける。猛きも恐るゝ無常の風凌は御法の「花衣。色には迷ふ人心爰に曰井堂の娘に。柏の前とて今年三五の秋の月。雲間を出る品容。未幼き時よりも御臺所に侍じら。何時の間にかは義綱殿と隙を求めて濡衣の。つまよもやはとの兼言も情あや仇と成り。れ出家ならせ玉を由。若左もめらは。自は何と成るべき。去乍ら主様は此事を嘗て御合點めらぬ由。どうぞ思案もがな實に思出したり。兵庫の督金平は此頃煩ひ出仕なし。未だ此事聞き玉はじ叶はぬ迄も頼みて見んど。其夜忍て只獨り金平「方へ尋ね行き。番の侍に近付て。兵庫の督殿兼々御存じの者成るが。夜中乍ら急用なれぬ目には掛り度と申てたへ。番の侍内に入り右の有増述ければ。やあら不思議思ひ

寄らす先此方へと申せ。長つて立出。此方へとて通しけり金平目早き男にて。なぞ誰ぞとまと思ひしにれ身は柏の前か。して夜更て只一人何として來られしぞ。只事にはあらじ早々語られよと云ひければ。柏の前悄悄と。義綱御出家のれ障我身の上の戀衣。裏無く交せし詞の未始終を委敷語り。此上り御身様を偏に頼み奉る。御出家ならせ玉はぬやうと云ひ捨てころ歎かるれば。金平呆れし顔ハせて。同。いやはや今時の子供に油断はならぬ。次郎殿も御身もまゝ置かと思ひした。大人恥かし其は其。義綱殿を御出家とは何事が目に見へしぞ。心安かれ此金平が。屍の有る内御出家にはなしやと。詞を放ち居る所へ義綱私に入り玉へば。金平驚き謹んで這は勿体無き御光來。定て御出家の義に付御入りと覺へたり。其段は柏の前が先立て告知らせし。憚り乍ら御前の義は此金平めに任せ。先此事落去の内見苦し乍ら是に在ませ。身はひしほに刻まれ。微塵の如くはたかるとも一念の君に仕へ。御出家にはなしやと御心安く思召せ。擬柏の前ハ世の取沙汰も如何なり。早々奥へ還られよ誰か有る御門迄。借に送りやせと云へば柏の前力を得。返すくゝと頼みを掛出るも惜き御名残。君に引るゝ後髪。いふも云われぬ「心なり。既に其夜も明ければ頼義公の御前には。東山の満容上人を法

待有り。詞。ほくの御勸に信心彌増候へば。今日加茂の次郎を剃髮致させん。授戒を頼み存ると宣へば満容は。扱も尊き思召立かな此世は僅か五十年。永き來世こそ貴賤を限らぬ一大事。若君御出家在まらば御一門悉く。一蓮托生有らんと何疑のゆべき。憚り乍ら拙者師弟の契約なし奉り。授戒を勤め奉らんと有れば君御悦喜斜にて。急ぎ義綱召せと有る畏つて各。若君の御殿に行き尋ぬれども見へ給はず。彼方此方と問廻れ共御行方知れされば。這は抑何にと勸轉し。詮議區々なる内に度々召の重なれば。是非に及はず御行方知れざる由を申上る。武將甚御機嫌損じ。扱ハ我命を背き逐轉せしと覺へたり。適れ不孝の大悪人最早我子と思ひ憂ぞ。何處迄も捜し出し。來るべしと云捨てさせ御座を立せ給ひしかば。上人も勿論伺候の各々色替へすの大事ころ出來れど。目も目を見合せ片唾を呑み。靜まり返つて居られしは苦く敷く敷く見へにけれ。然る所へ金平は赤地の錦の直垂の上に。墨染の衣を着し三枚鎖の甲の緒を締め大太刀を横たへゆらりと來りけり。各々興醒め。這は抑兵庫殿は珍らしき出立かな。して先義綱公のほ事聞れたるやと口々に云げれば。さればあれにて。承つたるが。近頃笑止千方にてそ存すれ。去乍ら是は今生僅の間の事なれば左のみ頓着有て入らぬもの。只々來世の勤て

そ一大事ならめ。幸ひ今日有難き御法談有る由承り。聽聞中さん爲參上致し候が。憚り乍らか上人へ少尋ね申度事御座ゆ。御覽の如く某洞斗沙門にて衣を着しゆへども。頭は修羅の奴にてゆ。此分にて死するあらば胴は佛体頭は其儘金平。佛の成損ひ迎明盃の佛達に笑れんも口惜しかるべし。迎もの事に上下すつきと丸佛に成る様を教へさせ給へ。但愚知の某なれ共二不審やて見ようする間。方一論じ負などし給はば。慮外乍ら此甲を御坊の頭に着せ申。某の弟子よな一人の首切る様を教ずさん。先淨土門に。一念彌陀佛即滅無量罪と唱へらる。此心はいかにと問ふ。上人氣疎き顔にて。扱も兵庫殿ハ。風流成る出立にて日頃嫌ひの佛法沙汰。近頃不審に存され共。安身を問ひ給ふに申さぬも如何なり。只々邪氣を捨て心を鎮て聞給へ。抑一念彌陀佛の本文といつば。たとひ五逆十惡の罪人成り共一念發起し歡喜の鉦を打鳴し南無阿彌陀佛と申れば無量の罪即滅し黄金の肌と成り。暫時の間に西方淨土へ往生するとのとなれば。信心を凝し尊み給へ金平聞て。フム扱は念佛さへ申ぬれば。何程惡事を致しても佛に成るとの御勤め。近比有難ふころゆへ然らば今よりして僧俗に限らず行達次第に首を刻。南無阿彌陀佛と回向し成佛致しやさん。又鉦打鳴し佛になるとの教へ是金平が身に叶ふたり。此年月の合戰毎

に太刀薙刀のかね打鳴し。打合せしと敷を知らず。然れば此金平は今生からの生佛。何と光が差中か。何れも拜み給へやとかなら〜とぞ笑ひける。上人大きに赤面し扱莫大成る無法人。我敬しくも惠心の僧都より五代の弟子。一代諸經を胸に納め佛法に於て不足なし。譬は金を以て一丈の塔を組し功德より。一日の出家の功德莫大なりと釋し給ふ。三世の諸佛を身よまどひ彌勒の出世に遭ひんする。釋迦同体の僧に向ひ傍若無人の雜言かある。六根しんるの通内ころ口に任せ云ひるゝ共。忽無間那落にだし。苛責の責に逢ん時。只今の惡言千万悔とも甲斐あらじと。面色筋をいら〜げ血眼に成て中さるゝ。金平打領き。同。チ、哀れ扱其無間地獄とやらんに落入。鬼とやらん阿呆羅刹とやらんに參り逢度ものにてあれ。去ば御坊の教化に任せ。來世こそ恐ろしけれ迎我も〜と出家せば。士農工商の四民絶田畑を耕すものも無く。五穀國土に絶果ば。敏し氣に嘲り給ふ御坊も渴し勞はて道路に倒れ死し給はん。其上來世は一大事とて六か敷様に宣へとも。古へより幾万人死すると雖も。佛法の大事を知らずで行損ひたりとて還りたる者一人も無し。勿体なくも我君へ。由無き異端の虛無を勧め參らせ構ひて汚坊。後に我ハし恨まるゝな。法師とても容赦をせぬ此金平成るぞと。若々敷云ひけれ共上人猶も閉口せず。

同。エ、愚なり〜。一句千万兩の金言を虚言とは勿体なし。御身が様なる外道の耳にの猶入まじけれ共。夫佛法を信すれば。現世にては横難の災を脱れ未來は九品の壘に生ず。阿字十方三世佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖經。皆是彌陀佛の秘願汝何で知べきと。居丈高に伸上り大汗流し怒らるれば。同。何にも〜我は元より愚人なれば阿字も彌字もいざ知らず。して佛法だに信すれば。災難を逃るゝとの教夫には證據はしゆか。中々其證據には。利劍即是彌陀名號迎念佛中行者に。打つ太刀も身に立ぬとの經文こそ證據よ。チ、頼もし〜然らば汚坊も念佛の力にて能災難を逃れ玉はん。いで試みに切て見やせん。随分逃れ見玉へと。太刀をすばと抜ければ。上人是へと動轉し周章狼狽き逃らるゝ。何處へかど追掛るを人々取付かけ塞り。御前近きに先暫くと制すれば。金平齒輪をし道は開へざる人々かある。無間の劫を勧めぬる邪慢我慢の外道めを。活て置ば口を利くなと討せては玉はらぬぞ。必定めの入道めは源氏の武力を、ん爲。大六天の魔王變化て來ると覺へたり。其を其とも辨へ玉はぬ君の御所存。方〜の心底いやはや無念口惜し。公達あまた在すす迎も弓矢取る身は定なし。明日にも乱逆起り義家公護光公。若も討死遊しなば源氏の御家を。誰有て繼せ玉はん。五人十人在す迎も多しとは先此金

平は存じ申さず。況や僅お三人中をば出家と仰左れり。是魔王めが勸ならずやいかに入々。
 次郎殿の此金平が隠奉れば。構ひて外を尋ね給ふな。某命の有らん限りは。義綱公の御髪
 逆は下らせり申さる。サア斯云ふを憎しと思は。誰にても討止よ。いやはや無心千万兎角物
 に限り有り。源家數代の御厚恩も今日迄にてゆぞ。朋輩達の好も今が限りを左らば迎。鬼を
 欺く顔はせに涙を。はらりと流し立歸りたる所存の程。忠とや云はん義とやせん通れ古今の
 稀者やと。皆感せぬ者こそ無かりけれ

第二

兵庫の督金平は急ぎ我家に立歸り。義綱公の御前に罷出御前の始終を残り語り。君御の腹斜
 むらぎ定めて討手や向ふべし。一先帝都を御忍びなされるべし。幸い江州石山に存じの者のゆへ
 ば。あれへ御越まじませと。手勢引具し都を出江州一指でぞ急ぎける。此事隠れ非れば頼義大
 將に立腹有り。扱も義綱めは父に背く不孝者。其上金平が匿まへて江州石山へ落けるとや。佛
 法せほろを破り主にたてづく大悪人。急に押寄せ討取れと御嫡子八幡殿に討手の大將仰付ら
 れ。侍大將には三浦の和田左衛門爲宗。鎌倉の權五郎景政。其勢七千五百餘騎石山寺へと

「押寄る。是は扱置兵庫の頭金平父子義綱公の御供也。石山寺に忍ひ居て移は變る仇し世の。

夢とや云ん現とやせん。昨日迄は天下の武將の御子成した。今日は何時しか引替て。人目も稀
 成る山寺に。幽の体にて暮らせ給へ。は袖手之間も無し。時しも秋の半にて名におふ月の夜
 成りしに。住持元より情有成て様々の珍菓を調へ。若君の御前に出膳涉涙敷まします。牙
 行く月を涉麗有り浮心を晴させ給へ。我々も諸共に月の前にて酒を汲み。秋の徒然を晴し申さ
 んど。常に圍ひ置たりし底前に浮供す。哥を讀詩を作り様々慰め「奉る。實にも今宵は秋も最
 中の空清く。二千里の外に隈も無し。義綱仰せける様何に方々聞給へ。左れば小野の小町が
 詠しにも。あすの夜を今宵になして月もがな。命もしらす曇りもやせんと。口吟みし言の葉も
 今宵の月に雨を厭ひし眺かな。かの紫式部を聞へしも。此石山に籠り居て三五夜中の月の色。
 海漫々たる湖水に映る影を見て。ウタイ水相觀を開きつ。桐齋帯木須磨明石。關屋蓬生數々
 の源氏の巻を書しるし。今昔をみての糸。縁に引れて我々も。漕き流れにすみの江の。松の
 梢は變ねと四方の若葉も紅葉して。木の葉乱る。谷川に風の掛たる柵。なべて絶せ思思か
 な。秋の草逆色々に桔梗菊並女郎花。萩や薄の乱れおひ。涙の露の自ら峯にさわたる小男鹿と

聲を比して。鳴斗り虫の鳴音もいと弱く。草葉にすだくきりくす。鈴虫機織蟬虫。雲井の雁の群がりて。都の方へ飛行けよに羨しや我も實に。翼のあらは九重に立還るべき眺かな。眠々たる峯の葛かづら鳥の細道物凄く。さうさうと鳴るは瀧の水。岩に碎けて飛散る。雪にまがひの糸櫻春の花かと疑れ。いと昔の戀しきに覺束無くも呼子鳥。せめて我名を夕月の。神の誓ひも曇り無く都に還るよしもが。南無石山の觀世音悲願たがはせ給はずば。二度故郷へ返つてたへ念彼觀音力と。肝膽挫た御起請ある心の中ころ「殊勝なれ。斯る所へ寄手の勢追一家の殊勝なは。さも大様に寄せ掛け聞の聲をも上ずして。ひつろと陣取居りけり。和田左衛門爲宗の萌黄匂ひの鎧を着。甲を脱で高紐にかけ。供をも連す只一騎門前に歩み寄り。同兵庫の頭へ對面しや度事有り。たツからかに呼はれば急ぎ此由訴ふる。金平木戸を開かせやめ爲宗。御分討手に向はれしかチ、太儀と云へば。去ばの上意なれ、義家公是非無く向はせ給ふなり。何と思はる、金平。一旦仰せ出されしとなれば急に御説も難し。次郎殿へ御出家あれ、何の別義無き間。是非に御意見上御髪下らせ申されよ。憚乍ら某も共々御意申へし。先篇と思ふても見られよ。假令何体の事逆御親の命に背かれては。未代迄の御かう

なん。只々御身が心一ツで納まりうらうに思はるれば。どうぞ了簡致れよと是非を圖つて母なる。金平聞ていやと爲宗。御身は知らず某の世は末と見受れば。片時も生延るをうらうくころ思へ其仔細は。何が天下の武將たる身の買主坊主に進められ。悪道に赴き給ふ御心底こそ墓なけれ。御身も文武の侍と。諸人に呼れしものなれ共今又次郎殿を出家とは。夫は掛らぬ爲宗世を誇らふか見苦し。大海が干瀉と成り富士山に翼生ひ虚空を飛で廻る迎も。次郎殿の御髪とてはさつと下らせ申さじと。父金時が位牌の前に誓言。立候へは。力及はぬ仕合なり。義家公へも宜しく申上てたへ。渡邊兄弟にも北國をり還りな。能く心得玉はるべし。誠に御身と某も竹馬に鞭の昔しより。連枝の如く親しみしに今歐味方と分る事。前世の劫と云ひ乍ら思へは拙き武士。多年の誼も是迄ぞ。公達の御事を必ず頼み申ぞと。涙に咽び口説にぞ。左しもに猛き爲宗も共に袂を濡けり。暫くあつて爲宗先此段を義家公へ言上せん。互ひに討とも討る、其尋常の沙汰成るべきに。搦ひて聊爾し玉ふなど念比に云替し。涙乍らに爲宗は本陣指てぞ「立歸る。斯て金平手勢幾らす物具をせ思ひの立立は。上を學ぶ下部迄命を惜む氣色無く。勇み進める有様は心地能く見へにけれ。金平が装束は紺地に龍比直垂に。馬

余威の大鎧草摺長に着なしたつ。赤銅造りの太刀刀十文字に脇挟み。軍配團扇携へ義綱公の御前に参り。誠に不慮の軍御難儀に思召れん某も功少より。今此年に及ぶ迄數度の合戦に出られ共。多勢に恐れず難慮にひるまず。怖きと云ふ術存せね共。此度の戦ひに寄手と云ふも御恩の主。味方と云ふも譜代の主君。向ふ御は傍證なれば只恥かしき願ひなり。左れば武士の身は父子兄弟の中とも避け。政敵に難多し必ず本意無く思すまじ。いざ軍の門出に御盃を上參らせ。某も一ツたべ下々にも下されん。夫くとゆふは山入日欺く盃を。盃に据へつゝ差上る。義綱取上らせ給ひ金平に差し給ふ。謹んで頂戴し引受續けて三杯予じ。並居たる軍勢にさいつさくれつ夢の世の。今日を名殘の酒盛ぞや慮外は傍證なるに飲や歌へやまひの袖。返くも面白やとしどろもどろの足拍子。軍の場とは「思はれず。去程に三浦の和田左衛門爲宗は。金平が所存の通り始終を中上げられ。義家あぐみ思召難儀千万扱何にと。の給ふ所へ父上より二人が首を討てやある。など遅はりし早くと使重なれば。義家赤面まし。是は餘りなる仰せ哉。よし此上は是非も無し急に攻掛討し。二人が首を持參して傍證を休めよ。采振上て。下知給へば方及ばず軍兵共。一度にどつと押寄て鬨の聲をぞ上にける。館の内に

も六百餘人共に鬨を合せつ。得物くを手々に引下げ討つ討たれつ。追つ巻つ鐵火を散して「戦ふたり。軍半に味方の陣をり二八斗の若武者の。紫紺濃の鎧を着一陣に進み出。某は金平が養子秩父の十郎頼平なり。凡主君の命には親の首をも切る習ひ。然れば味方に屬すべき法なれ共。悲きかなや某他門よりの養子たれば。今味方へ参りては養父を振棄強きに附しど。世間の批判を憚りは敵對中なり。日頃誰の人々首を取れやと云捨て。薄雲と云ふ太刀を真向に指懸し。大勢に破て入蜘蛛手環連ひ十文字に秘術を盡して「切廻る。手元に進む兵を三十六騎切倒し息を繼て居る處へ。寄手の陣より同じ年なる若武者。花やかに鎧しが白綾の鉢巻し。鎌倉の權五郎景政と名乗いかに頼平。日比の廣言に彌増し眼を驚したる働きかな。扱又涉透り金平の養子。某は烏帽子子なれば是兄弟の誼なれ共。親子兄弟迎も敵味方と分るは武士の習ひ。思へば淺間數次第なり。元より討ても討れても互に恨の殘らぬ中。いざ参るといひければ頼平莞爾と笑ひ。實にこれとがいか如く兄弟同士の中なれ共。思ひも寄ぬ軍にて今敵味方と分るれば。他人の見る目も恥らし尋常に致さんと。兩方先身繕ひの有様を寄手も味方も諳共。當時無双の若者共を由無き味方争ひに。殺さんとの殘念やと手に汗握り見物す。

時に二人の若共互に太刀を抜懸し。参りさふと懸を掛け丁々を打合せ。受つ流しつ抜つ潜つひらり〜ひらり〜と。蝶鳥あとの如にて更に勝負も非ざれば。一引々て息を次ぎ又様合せ入違へ。半時斗の戦ひの危くも又潔きよし。然る所へ渡邊兄弟飛鳥の如く駆来り。二人が中へ分て入暫く待方々と双方へ。引分け扱機に向ひ。兵庫の園殿は夫にましますか。我々只今罷上り此一乱を道にて聞き。驚き直に駆付ゆ。此園綱が歸りし上は何様にも首尾を繕ひ中さん。必ず早り給ふなど云捨味方の御陣に参り。八幡殿のお前に出。只今歸京仕るが驚き入たる御仕合。察する所天魔の所爲と存づれば御思案有るべき所にゆ。是々爲宗殿。若輩者の推参を申すは何にゆへ共。君を諒むるは臣の道。假令我君何体にも宣ふ共。理を立道を立幾度なり共諫言申其上にても叶はずは是。千年生ぬ命ならぞや。但名よりも命が惜うゆか。此上乍らも何卒思慮々廻らされよ。先此陣は我々が預申すと云へば爲宗至極に攻られて。扱々御分は若けれ共父武綱が子にて有。ナ、過つたり某が一生の不覺を。負ふた子に教られ淺き瀬を渡邊よ。何にも思案の有るべき事先々陣を引けや迎。露を片敷草枕粟津が原に陣を取り。各疲れを晴さるゝ危うかりける次第なり迎。舌根を標はぬ人は無し

和田左衛門爲宗は今日渡邊の園綱の。名よりも命が惜きかと恥しめしに心付。一子竹若丸を傍へ近付て。何と思ふぞ竹若丸。斯様よ挑み戦ふも主君への忠と云ひ。且は家名留めん爲。然れば汝も其も明日の命も圖り難し。同じ死すべき命ならば未代其名を殘す爲。何と二郎殿の御身替りに立やさんとは思はぬか。今日渡邊が詞の末。必定汝を義綱公の御身替りに立てませと。云はぬ斗と察したり。斯朋輩に氣を付られ。今は逃れぬ所なりとは思へ共汝は扱。我一命にも替えませじと。思ひ育てし事なれば。是非に死ね共云難し。爲問敷ものは宮仕へと不覺の涙に咽ばる。若年乍ら竹若は道三浦の子孫とて。わろびれたる風情無く。仰は左にてゆへ共。父のお爲若君の御身替りと有るから。何を命の惜からん。假令今宵生延し迎明日の軍に討死せば。君への忠は有りもやせん。父上のお心み叶ひで相果ゆえ。黄泉も如何と存れば疾々首を打給ひ。義綱公を助けてたべと潔よくころやけれ。爲宗大に感歎し扱もおとは我一子程有りけるよ。ナ、満足せり。然らばとて此段を金平に云聞かせ。首尾繕ひ計らはん。いざ左らば迎只二人忍びて一館に案内し。金平に對面し。扱只今來る事別義に非ず。兎角武將の

御一言翻し、爲給はじ。然ればとて若君を打奉らんも。冥加の程恐しくも御痛のしく。是非
 に行き當し心底を世傳竹若に語りしかば。恐れ乍ら身替に立ち度由やすに付。具して來り
 ひ。命に恙無くは程を経て何様にも成間敷とにてな。身は若君の供し何方へも立
 忍び。來らん時節を待給へ片時も早くも有りければ。金平暫く押俯きはら。と涙を流し。去
 とては我連も義を重んじての事なれ共。分親子が忠義の程骨髄碎けて覺へたり。尤心ざしは
 切なれ共。斯面白からぬ世に承らへ。何を樂み有るべたぞ。今生の思出に明日の軍に花を散し
 若君諸共自害して死なんと思ひ立て有る。人口憚り多ければ早還られよ爲宗。いやな金
 平。面白からぬ世を見て相果んとは分には似合ぞ。道の道たる時死なんこそ侍の本意なれ。
 數ならぬ共我々親子斯迄思ひ極めしを。無下にせんとい侮つて云はるゝか。但心底見ん爲ると
 色を違へやさるれば。チ、過つたり理りなり。此上は兎も角も身身の所存に任すべし。爲宗悦
 ひやれ竹若。汝が望み協ふたり急で最期の用意せよ。畏て命を惜む氣色なく。首差伸て待
 ければ爲宗太刀とするりと抜き。振上んとする手もあへて。氣も消え眼も眩みつ。太刀を
 らりと打棄てどうと伏して泣にける。竹若も共に心は亂るれ共。父に力を附んと思ひなふ後

れ給ふか父上さま。若も軍の場も出入手に掛りしは。さぞ本意無くも思召さんに御手に掛討
 給ふは。歎きの中の御悦び早疾々と勇められ。漸々心を取直し。擬面目あや兵庫の頭。最前の
 詞に違ひ只今の有様を。嘸や未練に思はれん。去乍ら山野に遊ぶ鳥獸類迄。子を悲まぬは無き
 習ひ五人十人有る子さへ。況てや我の二人共亡世の後迄頼みにせし。只一人の思ひ子を然も手
 に掛殺す事。奉公の身ならずば斯る愛目に見まじもの。あら恨めしの浮世やと擧上り歎くに
 ぞ。差もの金平諸共に聲を上げて泣にける。竹若も涙乍らいかに金平殿。斯時刻移りては共
 に未練の出ゆ。父は途方に暮給へは。憚り乍ら貴殿遊ばされて給はれと云ふ。チ、聞へたり尤
 なり。某討んと云ふ儘に太刀追取り立寄しが。見れば見る程顔形も義綱公に似參らせ。雪の肌
 へ爪外れあら勿体なや。ならぬくと太刀打捨て立退ば。爲宗今は思ひ切我子と思へば不便増
 す。過去の敵よ南無三寶と太刀振上れば金平おさへ。やれ待て暫し此事を母の方へ知らせた
 るか。云置事も有るべきに。今暫くを制しつゝ何に竹若。通れれとい幼けれ共世に例なき思
 の者。未代家の譽と成り先祖の名迄も揚るなれば。必ず死するを悔まるゝな。して又母の方へ
 云置き度事ハ非ざるか。同 ぞんゆ中置き度事數限り無くゆへ共。却て御難きの種をれば態と扣

へやさぬなり。此肌の守りを形見に參らせたまひ給へ。思へば慕なや母上の斯る事とは知し召さ
 ず。今朝此軍に出る時。目出度無事にて還れ汝の年も行ざれば。高名せども苦しからず。深入
 するな魁すな矢面をば除きて居よと。様々に云含め難くて有りし言の禁も。永き別れと成り候
 赤只返すも今一度。最期の名残りを惜ぬが。是の黄泉の障りなり。先立消る此身なれば雪
 折竹の逆横も。前世の事と思召し思し諦め給へやと。能く諫め給はれと打伏し沈み歎くにぞ
 爲宗いと心惜へ途方も更に涙乍ら。サ、其段は相心得母に申聞すべし。心安く思へよや。夜
 も更ぬ今は早是迄ぞと手足を震ひ眼も眩め共。思ひ切たる心から太刀をつ取。情無くも首を
 つと打落し。其儘死骸に抱付わつと消入る斗なり。哀れと云ふも愚なり。歎きの聲に義綱公驚
 き奥より出給ひ。此有様を御覽じ這の抑何にと呆れさせ給へば。金平右の次第を申上。同 爲宗
 が御親子の御間を大切に存るゆゑ。一子竹若を御身替にと申す敢ぬに義綱公。扱情なや方々は
 など最前み知らせぬぞや。親に不孝の某ゆる科無き者を殺す事。皆是我爲す業と云ひ世の罪
 も耻し。所詮今は是迄と太刀に御手を掛け給へば兩人忙て縋り付。同 這は勿体無き御仕業。
 君を助け奉らん爲二人無き子を殺せしに。御生害とは扱何に竹若不便と思召は御命全うし。亡

跡用はせたまひ玉へなう金平。最早夜も更明方近し。早くこれ供し退給へ實は尤時移る。然らば
 八幡の方へ御供申し恐ぶべし。相變る事わらば密に狀にて知らされよ。最早參るぞ去と云
 ば若君は爲宗に。親子が深き心ざし生々世々に忘るまじ。命ざに承らへば此恩は報んど。涙乍
 らに宣へば。道は有難き御仰せ此上乍ら御前の首尾。随分繕ひ申さん御心永く在しませと。
 扱爲宗が才覺にて金平が家來迄。事ゆゑ無く落つ。討れし者の首を切り。面の皮を剝取て金
 平の首に似せ。箱の四方へ火を放てば番手の勢一同に。すの金平は自害かと一度にぞつと押
 寄する。爲宗首共引下げ門外に走り出。同 義綱殿も金平も和田左衛門が討取たりと高からかに
 呼れば。各一駒を駈寄せて通れれ手柄目出度やと。凱歌とつと作立凱陣有るこそ「勇まし
 けれ。扱爲宗の義家殿の御供申し武將の御前に罷出。同 上意黙し難きゆゑ義綱公金平共に討中
 てゆと。則ち二ツの似首を御前に披露する願義御覽じサ、いしくも仕畢せし。誠に金平めは剛
 の者程有りけるよ。死後に面を晒さん事無念に思ひ。己と面の皮を剝しと見へし。二ツの首爲
 宗に取するぞ何様にも斗らへど。宣ひ御座を立せ給へば爲宗二ツの首を持。宿所を指して歸ら
 る。心の内こそ「悲しけれ。箱に成れば此の方出迎ひなを歸らせ給ふかね目出度や。定て首

尾も好からめと是又嬉敷侍ふなり。同して竹若の遅見へしがなを連ては還らせ玉はぬ。覺東
 なやどの玉へ共爲宗とかうの返事なく。唯情々と涙に惹て居玉へは。こは不思議竹若の過ちに
 ても致せしか。あふ氣遣はし早語られよと責られて。今は包むに包まれず情なや其方が。思は
 ん所も便無けれ共逃れがたなき仕義により。若君の御身替りに不便乍ら殺せしなり。生中見せ
 てつられ共切て此世の名殘にと。空しき首を出すにぞ氣も魂も消果て。取乱さんとし玉ひ
 しが誓しと心を押鎖め。同何竹若は若君の御身替りに立せしとや。未だ年に足らねば最期こ
 ろ怪けれ。虫性の色々し侍らはざりしか。爲宗聞玉ひ。いやと殺す我身ころ。前後ふかく乱
 れしを却て諫めし爲体。いやはや語るも語られずと云捨てしこと歎かるれ。痛はしや北の方
 いと心は消れ共。夫の心を勇めん爲。御歎きは理りなれ共。弓矢取る身の做ひ討死して入
 忠と聞く。況てや是は類ひ無き。御身替りに立事は。二世のねがひや三世の御恩。報ずるのみ
 か末の世迄も。名を残さんば此家の譽れにて侍らはすや。元より子の無き身と諦め必らず悔ま
 せ玉ふあよ。先々妾は佛前に此亡散を誘ひて。後世の手向を致さんと血にあへしたる竹若が。
 首を抱きて立足も心も「よりのよりの」と。一間所に入り早く空しき首を顔みめて誓し消入

泣給ふ。稍有つて涙乍ら。扱も一討も討たり討れも討れたり。惜まぬ武士の命乍ら。また生
 出る若竹の。葉末の露と消失せし空敷姿は何事ぞや。自ら女の身成り共君のれ爲に立命。さら
 一留むる心で無し。なぞ立歸り今一度母に名残を惜ぬぞや。父上斗り親にして母は親とは
 思はぬか。あら情なの我子やと泣涕焦れ給ひけり。餘り歎きの強けきや。今心も虚々とうつ
 と「とやせん。夢とのみ見へつ隠れつ。竹若が亡身忽然と顯はれて。暫く涙に暮乍ら。誠に御
 恨の數々御道理去乍ら。道は遠し夜は更る。事ハ急なりいかにして歸らん隙も無き影の迷ひの
 雲と立隠れ。晴ぬ中有の旅の空思し遣らせてたび給へ。去にても思ひ廻せば思はしや。須彌は
 地と成り滄海は。淺き瀬と成る御恩をば。露も送らで相果れば多罪まぬがれがたけれ共。主君
 の爲の御身替りに立金札を何にぞや。母の歎きの深ければ。其愛着に引されて。成佛更に遂難し
 我を不便と思しなばひたすら歎きを止め給ひ。菩提を用ひてたび給へあら名殘惜の母上様やと
 叫ぶ聲に驚きて。やれ竹若かと抱き附ば果敢無き元の首斗り。是は夢成る今一度詞を成共交の
 ぬかど。呼と叫べと其甲斐も歎き死ねとの事成かど。癖を叩き伏轉ひ焦れつて泣給ふ。和田
 左衛門爲宗は。最前より立忍び障子を隔て居られしが。さつと押明けいやなふ。御身の愁歎至

極なれ共。其歎きに引され竹若が迷ひ來ると覺へたり。我子を不便と思へれば香花を手向經を讀み。用ひ得させ給へやと様々なだめ給ふ所へ。女性一人駈來り懷中より太刀を抜き。夫の跡逃るじと爲宗に打て掛る。同やれ聊爾すな覺へなし。人違ひと云ひけれ共何人違ひとは思やと。無二無三に掛しを飛掛り取て伏せ。定めて狂女ならんと誓を引上顔を見れば。同や其方は奥の女中泊の前ならずや。して先某を夫の敵とは更へ合點ゆかず。其夫と云ふ者の名を名乗れ。ナ、自らが夫とはな。忝くも御身の主人義綱様よ。勿体無くも家人の身として能もれ主を討けるな。只一打にと思ひしに。女の身の墓なさは討もえなすぞ。刺手込にせられし無念やと齒嚙を爲して泣給ふ。爲宗姫を引起し。扱は理り若君と契りしり事は露知らず。語るまじとは思へ共御身が心底優しければ。巨細を語り聞せん。竹若丸を若君の御身替に立し事。委く語れば柏の前嬪敷もまた手持悪くも。扱々途方も無粗忽の段。眞平許るさせたび給と手を合せてぞ詫らる。いやな事知らずは誰進も。有間敷事ならず必心に掛らる。先以御身の扱。女の身として斯程迄思ひ入たる所存の程。感ずるに詞無し若君の御在所は。八幡に忍びまします。文の便りは某が。成程届け参らせん。心安く思はれよと。いと念此に宣へば姫は嬉し

數々の詞の。禮儀のべの露。しつぽと夫婦をとふらひて涙乍らに還らる。いづれ哀れ多けれとも斯る歎きは又世にも。類ひあらじと見る人聞人。袂をしぼれるばかりなり

第四

頼義公の御臺所は御子八幡太郎義家殿をお前に召れ。扱も加茂の次郎は父の御勘氣重くして。討れたるとは聞つれ共御身が討手に向ふ由定めて隠し路し置。父の御機嫌直さん爲斯偽ると推したり。幼心に義綱が嘸や。物愛く思ふらん密に人を遣はして様子をきかまほし。忍ぶ所を知らされと小聲に尋ね玉ひけり。義家行當りたる御顔はせにて。同御返事をや上るも便無けれ共。世の常成惣御立腹にてとかく討との仰せに任せ。和田左衛門が手に掛首をも實檢あられてし。某も弟なればなんばう不便に存しか。とも御憎しみの深ければ思ふ儘にも成難く。是非無く討せてしと情しとして宣へば。何爲宗が手に掛け義綱を討けるとや情なや。今迄はあの爲宗を武士かどこを思ひしに。義理をも知らぬ人畜類にて有りけるよ。何に主命重き逆是も譜代の主ならずや。同何に義家。御身も源家の惣領とも云はる。身か。親の短氣にれどりあひ。現在の弟をば賣て我手に掛くるか。家來の者に殺させて手柄らしく我前へ。慚をも知ら

で来られし。主も主下人も下扱も無慘や義綱が。かばかりつらき世に生れ十五に足や足すして。然も下人の手に掛るは過去の因果と云ひ乍ら。一ツは父の酷きゆゑ。愛きが上に愛たれを。生永らへ見んよりは。共に殺せやれ早殺せと人目も分せ泣玉ふ。痛はしや八幡殿至極に迫る御恨。とかう詞も出されず。面目無げにぞ見へ玉ふ。女房達も涙乍ら色々宥め参らせて。奥へ誘ひ奉る詮方。もなき次第なり。義家ハしほ〜と常の所に入り玉ひ熱を思ひ廻らすに。母上の御恨重々道理至極せり。尤父の御仰もだすり不孝と云ひ乍ら。何ぞぞ思案も有るべき事を早まつたり後悔さ。此上母の某を御覽せん度毎に。恨み歎かせ玉ひなば生て居る甲斐有るまじき先非を悔ひて益無し所詮我も腹切らんと。太刀に御手を掛玉ふがいやく。此儘にて相果ば狂氣やせしと云へるべし。母上の御方へ昔置獲しかばやと。料紙に向ひ來し方の御悔みの數々に。名残を忍ぶ涙に暮定かならずも書留め。今は早是迄と思ひ切たる下よりも。御身の上を觀じ玉ひ。淺間しや我今武將の嫡子として。誰を相手に暗々と。我と我身を害せん事思へば弟を殺しぬる。因果の報ひと覺へたり。此世からさへ斯斗。未來は猶し何ならんと。思へば最と心細く御涙こそ切なれ。エ、不覺なり我心。五塵六慾榮耀富貴生々の父世々の母。地水火風

に還す身を。迷ふの愚痴の爲す所と今はあつ〜と思ひ定め。源氏重代鬚切丸するりと抜き給ふ時。白鳩一羽筆を加へ虚空より飛來り。障子の面に有々と大文字を書顯はし。南の方へ飛去りしは不思議と云ふも「とうかなり。義家奇異の思ひを爲し立寄て讀給ふに。生れ重し死に輕し武運の時るゝ時を待てと神託方に疑ひ無し。扱は氏神正八幡我を不便と思召し。愛憐の神心仰ぎても猶餘りあり。此上は告に任せ生害思ひとまらんと。八幡の方を禮拜し數の御祈願まします。せし。義家公の御命危うかりける

かしの前道行

今日と過ぎ明日をもいさや。白鷺の命ハ更に惜からねど。今一度の逢瀬をは。神や佛も憐みて願を叶へをばしませ。足柄箱根玉津島貴舟や三輪の明神は。夫婦妹背の語らひを守り玉ひん御誓ひ。頼みを深く掛巻も八幡と聞けど。名のみ斗に白菅の。笠を着て見よかしの前。杖を頼りよ忍ひ出。實にや鬼神も納受し武士の心をも。和ぐるは和哥の道心を盡し我君の。寫し玉ひし古今集。愛きを慰むかたもやと。懷に抱きて愧ゆき重き身としも人や見ん。よも其逆も君ゆゑと。思へば苦しからげ禊の。袂ふり〜た〜と。たゞり行儀とどうどの前。夕日傾く西

の岡河田の面に居る田鶴も。雛に思ひは有るものを。況ていはんや人の親の心は闇にあらね共
 子と思ふ道に迷ひぬと。連ぬる枝を徒に。なき身を聞けばいつき木の歎きに沈む涙川。袖の
 柵何時と無く。秋風烈し羽鳥の里。木の葉時雨に埋もる。千草の色も虫の鳴音も枯らぬに。
 いと哀はますほの薄。乱れ〜てよは〜と。立休らひて在せしが。妾心あらん身あらば斯
 る折ころ腰折を。次やせまじと思へ共。なまじ詠ても貫行が。筆に發して有原の。其濡男と
 聞えしは。心餘りて詞足らず。慕める花の色なうて。匂ひ残れる風情かや。華山の僧正遍昭の
 誠少し。書にかける女を見て。徒に心を動き如くあり。喜せん法師の其詞かすかにて。秋の月
 雲に入るとを記しける。小野の小町は。妙なる花の色好み。歌の様さへ女にて。只よは〜と
 詠ところ。大友の黒主は。薪を負へる山人の花の蔭に休み。いたづらに日をや送らん。此處に
 心附く我も此處にて。徒に。日をや暮さんいさ左らばと。道を早めて行く水の。淀の川橋と、
 ろ〜と打渡り。鴻巻浪のよるとなく。晝と隙なき水車くるり〜。くる〜ら〜ら〜と
 つと汲流す。釣瓶の車とく〜と千屋も過る心地して。八幡のみもとに「着給ふ。去程に坂田
 の金平は爲宗父子が忠節無下にせんと本意無く思ひ。日頃の短氣を押銀め義綱公の御供し。八

幡の坊に隠れ忍び月日を送り居たりしが。或夕暮に義綱公ね山へ參詣ましませ共。金平は常な
 らず頭痛甚だ止ざれば。れ供を欠けて坊に残りふんどり返り寝も寝られず。詞。チ、思ひ出した
 り。此の比打絶軍せず五体を只おきやすむにより。病めが害をなし。再發すると覺たり。哀れ
 扱何處にて成り共手比の兵亂起れかし。素浪人の事なれば弱き方へ加勢して。五万もあれ十
 万もあれ。太刀の刃の續く迄片端より切靡け。太刀も刀も折碎けば大手を廣げ分て入り取ては
 投踏倒し又は捻首人襟。算を亂さば大將め定て逃んばつかけん。手酷く追れ詮方無く天へ上ら
 ば諸共に。慾界色界無色界非相非々相十二天。地を又潜らば八万那落閻魔王が味方して。鐵の
 門を立獄卒共がかかてむ共。金剛力を出一つ〜あいやつと押潰し。十王冥官片端よりころり〜
 と踏倒し。彼の大將めを生捕つて褒美を取て歸らんもの。何の因果に近年は。斯く靜謐に治ま
 りし強合も無き世間やと。大欠伸して若君の御小袖を引かぶり。高枕して臥たりしは連まじ〜
 かりける所存なり。去程に柏の前漸々八幡に着しかば件人の坊に尋ね入り。案内と云へと答無
 し是は何にぞと差覗けば。黄昏過る宵の間の月も「おぼろに木の葉影。路次の細目に明たるを
 密と開き内へ入り。透して見れば若君の御紋の小袖ぞつとして。嬉みの毛いよだて共まで暫し

君は元より我迎も人目を忍ぶよるの空。とに静まりまじませばと。静かふ立寄是申柏が参りて候なり。まだ宵の間に静まるは御憎もやましますつと。いふ聲金平耳に入り。扱も優しや女的身とし遙々尋ね来る事。よつく君を思ふも悉起上らんと思ひしが。いや〜追付君の御下向ならん。其迄欺して遊ばんと。爾々小袖引かぶり空舞入して居たりけり。姫は心おくがれて。なふ日頃のれ詞に替り愛想も無き御風情。妾は君の御事れみ夜書と無く案ずれば。露の間もまどろまず。餘り有るにもおられねば實ては見もし見へ奉らんと。夢にも知らぬ道の邊を尋参りし其甲斐も。情なの我君やと涙に暮て口説かる。され共とかうの應なけれバア、御心強や鬼成り共。今の哀はとふらはん假令れ厭と思す共。只一言の御應有るとて御罰も當らまじ。但妾が身の上は何ぞぞれ恨ましますかと揺れと〜返事なし。塚にせいて柏の前溜息をつぎ身をも〜へ。何程空寝なると共詞を交さで歸らふかと。咽の邊脇の下彼方此方とさうぐれば。金平今ハ堪へ兼。くつ〜と笑ひ出し小袖を取て起ければ。斯は恥しやはまつたり餘りとおれハ胸怒な。しやゆに面白ふにと有ればいやなふ。伺いッかに此金平が濡の道を不得手な逆。若君のれ留守成に。生若其方と詞を交すハ不義じやと思ひ。其上餘り頭痛してとろり〜と寝入

し。御身の拾りまをぐられしが按戸と成て能成たり。先々知らぬ道と云ひ。遙々の所をば能も尋ねて来られし。夫程君におもひくかや是こがね心中め。嗚や草臥たるらんと。いふ所へ若君御下向ましくて。這は抑柏か懐しやと先立るのは御涙。姫も逢見る嬉し。涙乍らに過來し方の數々積る物語り。嗚やと云ひて金平。シテ先う〜方には御氣嫌宜しくましますか。中々恙無く在せし。の知らせ玉はぬ御事とて。御痛ハしや御壺様には義綱様の御事を明暮歎き詫とせ玉おが明日ハ六條河原にて。思はしや御追善進満容上人に頼ませ玉ひ。流れ瀧頂侍ふと聞も敢ず金平。何夫は定成か。扱勿体なや思はしや。未だ勇々敷若君を追善させては叶ふまじ。是といふも満容めを浮世に承らへ置くゆゑなり。屈竟の思案ゆへば。今宵都へ忍び行き明日は君を世に立るか。左無くば天下を暗黒か。ニツにニツの御運どやとは云ひつ某が。些共粗忽は致すまじろく成る道を立切て。邪法の外道を隨へば御運に叶はでゆべき。いさ〜左らばとゆふしでの神の宮居に念願し。柏打連御供や都を指してぞ急ぎける。彼金平の詞の末。誠に道有り。潔し心地能共中〜中斗は成りけり。

御捕はしや御靈は義綱公の御事を。深く歎かせ玉て頼義公へ御訴訟有り。追善様く有る中に刃に掛る死纏には。流れ瀧頂ころ勝るれと満容上人を頼ませ玉ひ。數多の僧衆誘引し六條河原に出らるる。御靈も御出まじませは如何思召れけん。武將も跡より來臨有り御機敷に入り玉ふ。尤諸侍ハ殘無く暗れ「がましき法事なり。抑流れ瀧頂の瀧船は。高麗唐土の梁の武帝弘法に御歸依有り。三寶佛陀を信じ玉ふ。或夜の夢中に老翁來つて宣はく。左れハ六道四生の衆生。無量の苦み止む事無し。此苦を逃るゝ功德をば名付て。水りうゑと號す。尤勝れし功德。上は無量の佛菩薩圓覺しやうもん明王八部。梵王帝釋婆羅門せん。二十八天日月星辰下は。人倫下界の龍神阿修羅羅冥官地獄餓鬼。ゆうてんたいこん鬼神迄發らす供養を受るなり汝是と加せと。靈夢を代々に傳へ來て。六しもの閻を照すなる先中陰を表し。四十九本の卒塔婆の數。限り知られぬ棒け物。燈明風にまだくけば。花やちりくくしきみ。香の烟ハ四方に満ち五如來の旗を立て。上人禮拜事終り噴嚏を澄すきんの音。にようを鳴しはちをつき。施餓鬼の儀式ぞ殊勝成る。早暮掛る水の面建る卒塔婆の蔭よりを。けしたる姿杖に縋り左も物凄き聲音にて。我は坂田兵庫の頭が亡靈成るが。未だ三途にうらたへて。地獄へも極樂へも。有付

難くはへば。上人の法力にて浮べてたはせ玉はれと。しほくともそいめり。上人聞も敢ずあれく何も御覽しへ。日頃の惡逆邪慢の心めの如を迷ふなり。何を恐しきとにて候はぬか。去乍ら仇をば恩にて報する習ひ。愚僧浮べて得さすべし。やあ金平が幽靈婆の惡念を翻し。只一心に彌陀の名號を唱へよ忽ち淨土に往生ぞ。左わらば十念を授んとおれば。いやく其念佛にて佛に成れり。地獄罪人一人も無し。痛はしや御坊は。人を佛にする術をかつて不得手と覺たり。上人きよつとして。何々死しても休まぬ我慢や幽靈。いつぞやも示せし如く。阿字十方三世佛。彌字一切諸薩陀字八万諸しやうぎやう。皆是阿彌陀と説く時は念佛の功德より。勝れて浮ぶ經は無し只念佛とやせと有る。同して其阿字十方の文ハ何經にか書されし。釋迦一代の説教に遂に聞及ばぬかと云ふ。満容はつと思はれしが左れ共騒がず。同くハ不審尤なり。此文は彌陀の秘密の本願ゆる經文にハ説ね共。淨土の安身功德無量の要文とて。先師惡心の僧都世に弘められしへと答ふ。ム、左すれば惡心は大天魔。其未弟なれば和僧は外道に極まりたり。隨分人をたぶらかし。魔道に入れよ地獄に落せとゑせ笑ふてぞや。上人大きに立腹有り。扱勿体なや佛薩の化身迎。世上に奪ふ惠心今又日本の地に於て。肩を並ぶる僧も無き

近代智識の満容を、外道と云ふは奇怪と河原の石もわるし斗。地だんご踏で怒らる。同
 や是非を理には立難し餘りせくな篤と聽け。其阿彌陀如来と惠心と遂に近付と云ふ沙汰を聞か
 す。釋迦に知らせ玉はぬ事を惠心がゆかて知るべきや。左れば佛の遺言に。我經の外正法お
 らば是天魔の説なりとしるし玉ふ。然れば惠心も汝も外道に非ずや。餘經餘論を見ず知らず。
 小乗僅の産學よて近代の智識を。推參至極の辨口かな。蛙は口よりして呑れ。井の内の蛙こ
 そ大海を知らぬなれ。外道と知て生置かば佛法への不忠ならんと。飛掛れば満容の跡をも見す
 して逃らるゝ笑止といふも愚なり。御前に有りし人々皆咬き叫きて。生て有りし時だにも持扱
 ひし金平。死て死靈のとなれば若も障化やならんかと。手に汗握り太刀抜き寛げ片唾を呑で居
 る所に。武將は少も騒ぎ玉は。扱潔し金平。尤斯こそ思ひしなり。此上は加茂の次郎が勘
 當許すぞ。具して來れ早疾くとの玉へば。是は恨めしき御誕かな何に御救免有難しとて。死
 失玉ふ若君をいかで御供中なるべき。去乍ら若君の切ては死後の悦び。某連も有難しと空泣し
 てまろ居たりけれ。君聞召やれ兵庫の頭。譬へば布留那の辨を假り文珠は智恵にて偽るとて。
 天下の武將に備はる身が暖に欺騙されふか。日外實験せし二ツの首。元より賢首を知つたれ

共。改ためざるは爲宗が所存を感じゆゑにて有。何に爲宗。義綱の首とて我に見しは。疑
 ひも無く其方が一子竹若丸が首なるよな。實や人の親の習ひ五人十人有る子さへ。何れ愚は無
 きものを。況てや世にも只一人を主の爲とて討たりし。心底を感ずれば涙は胸に迫りたれ共。
 折こそあらめと今迄は。知らぬ振にて打過ぬ。簡程迄方々が忠義を盡す心ざし。返々も満足せ
 り。思へば故無き事により。何に主の爲とて二入も足らで竹若が。身替に立心の内推量られ
 て不便やと。御落涙ましますば御前に並居し人々も嗚咽返りて歎きけり。重ての御誕には何に
 金平。爲宗親子が忠節此度勘當許すでは。聊無下に成るれば。早やく次郎を連れて來れ金平承
 り。憚り乍ら某も御心底を推量り。元より夜中の事なれば最前より御供中。是に隠し奉ると
 御手を引て出ければ。我君御臺を初めとし。上下一度に悦びの聲は暫く止ざりけり。扱爲宗
 に宣ふは竹若に相後れ無便無く思ふべし。思案あれは奥に使ふ柏を養子に致すべし。則義綱に
 娶合せ祝言せよと宣へば。是は有難しと爲宗は歎きの中の悦びを。御臺所もお使を金平爲宗兩
 人へ。つとく禮數々の御引出物給はりて。各打連歸らせ給ふ國土安全君長久。千歳をの
 ぶる松の緑も榮行く御代こそ目出度けれ

金平法問詳終

五紙書

初版

二冊

一冊

一冊

三

明治廿九年二月二十四日印刷
明治廿九年二月二十六日發行

(定價二十五錢)



發行 印刷 發行 全 全 發 印 發 行 者 者 者 元 者 者

(肆書捌賣)

神田區表神保町
芝南佐久間町
京橋尾張町
京橋彌左衛門町
神田裏神保町
神田湊集館内町
神田南神保町

上田屋支店
黒雲堂
松江堂
松屋支店
巖々堂
東海堂
栗西屋

本郷區元富士町
牛込神樂坂上町
神田錦町一丁目
神田一ツ橋通目
大坂北久寶寺町
横日本橋通三丁目

盛春堂
盛文堂
武藏屋
有斐閣
丸善書店
丸善書店
丸善書店

京都市都
京都市都
京都市都
大坂都
神戶都

便利堂
有隣堂
文林堂
吉岡書店
久榮堂
大黒屋

早矢仕民治
神田區宮本町五番地
松本區湯島壹丁目拾三番地
丸善書店
日本橋區通三丁目
武藏屋書閣
神田區宮本町五番地
中西屋書店
神田區表神保町二番地

○近松集林子作淨瑠璃本既刊目錄時代物卅三種廿八冊世話物廿四種十二冊(每冊定價七錢 郵稅二錢)

- 一 傾城反魂香
- 一 曾我會稽山
- 一 雪女五枚羽子板
- 一 世繼曾我合本
- 一 金平法問合本
- 一 天智天皇
- 一 十二一段
- 一 日本振袖始
- 一 百日曾我
- 一 出世景清
- 一 關八州鬻馬
- 一 本朝三國志
- 一 吉野都女楠
- 一 堀山姥
- 一 右大將鎌倉實記合
- 一 唐船嘶今國性爺合
- 一 源氏烏帽子折九合卷
- 一 最明寺殿百人上郎
- 一 遊君三世相合卷
- 一 碁盤太平記合卷
- 一 百合若大臣野守鏡
- 一 國性爺合戰
- 一 國性爺後日合戰
- 一 双子隅田川
- 一 善光寺御堂供養
- 一 一心五戒魂
- 一 傾城酒香童子
- 一 天神記
- 一 信州川中島合戰
- 一 津國女夫池
- 一 天鼓傾城吉岡染合卷
- 一 心中重井筒合卷
- 一 伊達染手綱合卷
- 一 懸八卦柱曆
- 一 心中宵庚申合卷
- 一 心中天の網島合卷
- 一 曾根崎心中合卷
- 一 心中二枚繪草紙合卷
- 一 細多小女郎涙枕
- 一 今宮心中合卷
- 一 卯月の潤色合卷
- 一 鎗權三重帷子合卷
- 一 山崎與次衛門合卷
- 一 生玉心中合卷
- 一 女殺油地獄合卷
- 一 卯月の紅葉合卷
- 一 薩摩歌合卷
- 一 堀川波の鼓合卷
- 一 心中萬年草合卷
- 一 冥途の飛脚合卷
- 一 夕霧阿波鳴渡合卷
- 一 心中又水の朔日合卷
- 一 五十年忌歌念佛合卷
- 一 長町女腹切合卷
- 一 淀鯉出世瀧合卷
- 名家傑作
- 一 大塔宮職鏡
- 一 三世二河白道合卷
- 一 八百屋お七合卷
- 一 末廣十二段合卷
- 一 心中二腹帶合卷
- 一 井筒屋源六戀美合卷
- 一 男色加茂侍合卷

近松集林子作淨瑠璃本既刊目錄

